

文化の国に日本の心を ——オーストリア剣道協会（AKA）との10年の歩み

AKA剣道師範 亀本 龍太郎

日本人会50周年にあたり、記念誌原稿執筆のお声を掛けていただいたものの、直接日本人会に貢献するような活動は何もできていない自分が、恐らくや他にも数多くいらっしゃるであろう諸先輩方を差し置いて、紙面を割かせていただくことに少なからず申し訳なさを感じつつ、ご依頼を請けさせていただきました。

私が「全日本剣道連盟」の派遣講師として、初めてウィーン・シュベツヒャート空港に降り立ったのは1998年、小雪の舞う二月朔日。当剣道協会会長のハウック氏と当時日本人学校教諭の更田匡史氏に迎えられ、まだ見ぬ当地の剣道家達との出会いに思いを馳せたのでした。

当時のAKAの規模は、国内全体でも日本の大きな体育専門大学の剣道部（全学年）の部員数にも満たない程度で、日々の稽古にも7、8名しか顔を出さない程度の寂しいものでした。竹刀と防具袋を担いで街を歩いていると、途行く人に怪訝な目で見られ、問いかけられて「剣道の防具」であると告げると、「ああ、知ってるよ。テコンドーね！」としたり顔で答えられるのに、いつもガッカリとさせられていたものでした。また、暑い夏の体育館の窓を開け広げて稽古していると、「悲鳴が聞こえる」と近所の人々の通報で警察官が駆けつけて来たことも何度かありました。それ程までに当時はまだ「剣道」の知名度はかなり低いものでした。

しかしそれが、この5年ほどででしょうか、爆発的に増えてきました。もともと、剣道を始めた動機に「黒澤映画で三船敏郎演ずるクールなサムライのようになりたい」といった人が結構いたのですが、それがここにきてまた違った「クールなサムライ映画」の波がやってきたのです。もうお分かりでしょう。「ラスト・サムライ」などです。私達の目から見れば、渡辺謙や真田広之は、まずまず良く演じていたのかも知れませんが、彼らにしてみればやはり、同じ西洋人のTom Cruiseでしょう。寧ろ日本人の三船・渡辺・真田よりも身近に感じられて、「自分もああなりたい」と思ったのかも知れませんが、女性の入部者もかなりの数だったのは驚きでした。

でも、映画のように上手いかないんですよね。見る分には簡単そうですが、やってみるとこれがなかなか…結構きついですし。で、最後まで残るのは10分の1。でも、それでもいいのです。10人来て1人残っていたのが、80人来て8人残るのですから。そうやって、少しずつ人数・知名度ともに上がってきたように思います。

「ラスト・サムライ」で、スポットを当てられていたことに「武士道」があったと思います。

派遣にあたり、私の大学の恩師でもあり、国際剣道連盟の副会長でもある先生から、「剣道には二つの側面がある。『競技的側面』と『文化としての側面』だ。そのところをしっかりと理解して、いずれか片方に偏ることなく、指導しなくてはいけない。」とのお言葉を頂戴したものでした。そのことが今も、私の指導方針の根底に流れています。派遣講師としての任期は半年のみでしたが、その期間を通じ、そしてまたその後「派遣」という名をはずれ、個人的に再度渡嶼してから今日に至るまで、「剣道は競技であると同時に『武芸』という名に代表される芸術である」という持論に基づいて、技術的・精神的な面も指導している心算です。ただその「文化的側面」も、音楽・美術といったこの国を代表する文化とは全く性格を異に

するもので、その理解のためには、日本・日本人の心を少しでも理解せずには、その「神秘的な領域」には、とても近づけるものではないということが、指導上の大きな壁でした。その「心」が「武士道」です。

新渡戸稲造の名著「武士道」をテキストとして、勉強会を開いたりもしました。(半分「飲み会」でしたが)そこで、お酒が入っていることもあって、皆真剣に議論するのです。「名誉」について、「恥」について、「義理」について…

「名誉」を重んじて「死」を択ぶ「切腹」には、やはり非常に興味や疑問が深かったようです。その「勉強会」を通してではないですが、この多くの人は「剣道のオリンピック参入」に反対しています。「柔道のようになってはいけない。」と。

(柔道関係者の方、いらっしゃいましたら、すみません。)
「相手を投げて一本勝ちしても、ガッツポーズなどしてはいけない」と。「あれは『武士の情け』がない」と。少しは、理解してきてくれているのでしょうか。その理解の程度に比例するように、少しずつ各種大会でも好成績を残すようになってきました。オーストリアの選手が、将来欧州チャンピオンになる日はそう遠くないのかも知れません。

私にとっては、稽古の場がウィーンに住む日本のお方と知り合う大事な機会でした。これまで多くの方がお出でになり、そして日本に帰って行かれました。多くの方が、初め見学に来られて、「日本よりも日本らしい」との感想を持たれ、その次から本格的に稽古に参加されるようになったものでした。その雰囲気は、勿論これまで様々に関わって下さった日本人剣道家の皆様のお陰と思っています。そして、今その日本人剣道家がこれまでの10年の中でも特に少ない状況です。

現地の人たちが、「日本のものは日本人から学びたい」、「日本人と一緒にやりたい」と思うのは当然のこと。フラメンコを日本人に教わってもピンと来ませんよね。如何でしょう。

貴方も「日本人の心」を私達と一緒に、のんびり屋ですが純粋なオーストリア人に紹介する「特命文化全権大使」の役割を担ってみませんか？

そこまで大げさに考えなくても、忘れかけた「日本の心」を思い出すきっかけに、竹刀を振ってみるのもいいかも知れません。これまで、あまり日本人の輪に対し働きかけをしてこなかった私も、「未経験者のための『日本剣道形』講座」など、今後企画していきたいと考えています。

そしていま、オーストリア人だけでなく、日本人の皆様にも「日本の心」を。



多くの弟子が亀本師範のもとに集う(前列左から3人目がご本人)